



下吉田中学校に設置された「李良枝コーナー」

広報『ふじよしだ』(No. 506) より転載

## 想像的世界、小説への道

—— 乱舞するナビ・李良枝 (前篇)

The Way of the Novel and the World of Imagination

—— A Dancing Butterfly・Lee Yangji (I)

我々はどこから来たのか

我々は何者か

我々はどこへ行くのか

—— ポール・ゴーギャン

顧

Gu

偉 良

Wei-Liang

—— 目 次 ——

序

一 「在日」とは

二 「日本人になりきろう」

三 壊れていく家庭

四 「内なる朝鮮人」

五 他者の＜声＞

結びにかえて

## 序

日本に住む在日朝鮮人は、「日本」と「朝鮮」との狭間で苦難の歴史をたどってきた。長い歳月のなかで、彼らは「在日」の文学という独自のスタイルを築き上げたのである。「在日」の文学と一言で言っても、新旧世代の作家の間には、世代の差、また作品の質的な変化が見られる。旧い世代の在日朝鮮人作家は、不幸な植民地時代、朝鮮半島の分断という厳しい現実を目の当たりにして、民族の独立・統一や家族の離散といったテーマで祖国や家族の共同体の夢を描くのが多かった。言い換えれば、政治的な問題が小説化されるのが、従来の「在日」文学の特徴であると言えよう。

ところが、第三世代の在日朝鮮人作家には、もはやそのような共同体への夢はない。「在日」の文学の流れは、確実に変わってきた。日本と朝鮮の間に横たわる不幸な対立の歴史や観念を乗り越えて、日常生活の中の家族問題、あるいは自分と祖国との関わりに目が向けられ始めたのである。

李良枝は、1980年代に頭角を現わしたとき、その文学の新しさが「在日」文学の世界に衝撃を与え注目の的となった。彼女は、「私」的体験をふまえ、母国でカルチャーショックを受けた在日同胞の留学体験を描いた、戦後はじめての「在日」の作家なのである。

1980年5月、巫俗舞踊を習いに「朝鮮人」としての属性を求めようとする李良枝が、あこがれの母国に留学したが、母国で彼女を待ち受けていたのは、「キョッポ」（在日同胞に対する蔑称）という扱いだった。韓国人になりきれないという言葉上のわだかまりに悩まされた彼女に、究極的な力を与えてくれるのは、彼女が苦勞して習い覚えた母国語の韓国語ではなく、彼女が生まれ育った日本の言葉だった。李良枝の場合は、しばしば韓国語による表現不可能性が、文学を表現すること自体を危うくするほど極度の不安となるが、日本語は、精神的苦痛に満ちた彼女を、エクリチュールというこの終わりなき営為に送り込むような根源的な力へと導いてくれた。あらゆる対立、反目、憎しみを乗り越えたあと、民族的アイデンティティなどというものがもはやいかなる意味ももた

ない文学の世界で、李良枝にとって日本語で刻印された小説は、彼女と母国との間、すなわち表現不可能なものとの間をつなぐものとしての言語の出来事の場合なのである。この意味で、彼女の歩んでいた道は、「朝鮮人」としてのアイデンティティの探求を通して、「在日」としての差異を発見したと言える。小説家としての李良枝は、決して悲劇的な生涯を送ったのではなく、日本語で小説を書くことの幸福を経験したのである。

本論考は、日本と韓国での暮らしをしていた李良枝の文学遍歴を考え、「前篇」と「後篇」に分けて考察したい。この中で、「朝鮮人」としての属性を母国に求めようとした李良枝が、「家」と「祖国」との間（日本/韓国）を徘徊しながら紆余曲折の生活を体験したすえ、想像的世界、小説を作るに至るまでの彼女の遍歴を検証する。これを通じて、李良枝の文学の異邦性を考えてみたい。「前篇」は、ただ単に李良枝の過去の生活を再現するような単純な目的ではなく、両親の離婚騒ぎからくる存在の根源的な不安にさらされた李良枝が、高三を中退し家出をしてまで、別の世界に自分自身を探し求め、その後「他者」との出会いを繰り返すのを経ることによって、尋常の言葉では言い表せない自分（表現不可能性）を突破していく過程を考察したい。

## 一 「在日」とは

「鳥賊の瞳の潤みて海に向き干さる」と、この俳句は、五歳のとき済州島から日本に渡ってきた在日朝鮮人作家、金泰生キム テセの作った句である。この俳句から、玄界灘を挟んで海の向こう側にある祖国/故郷の山河を眺めると、読者が勝手に想像するのは結構だが、「祖国」と呼ぶ言葉は重すぎる。だが、「鳥賊の瞳」に託して巧みに表現されたこの俳句は、実在に在日朝鮮人たちの複雑な心境を語っている。

「在日」の文学は、これまで南北朝鮮の二者択一をめぐる不毛の民族的アイデンティティの帰属が鮮明な主題となっていたと言っていい。林浩治氏は、その著書『在日朝鮮人日本語文学論』\*1の中で、「在日」の文学状況について次のように述べている。

祖国が分断されている現実がある以上、在日二世朝鮮人たちが自己の民族性を満足させる（民族に属性を求める）ための選択肢は、北朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国を選ぶか、南朝鮮＝大韓民国を選ぶか、それともどちらの国家権力の枠もそれとしては選ばないかの三つである。（中略）「在日朝鮮人文化人」を包摂する状況の厳しさは文学以上に難しいものがある。

文学が真理の追究であり思想の表現である限り、在日朝鮮人作家たちが自己の民族的属性をそこで開帳しようとするのは、現在の日本社会の閉鎖的な状況下ではしかたがない。（中略）李良枝がいわゆる純文学作家として「ナビ・タリョン」で登場したとき、そのテーマの新しさには時代を感じさせるものがあつた。それまでの在日朝鮮人作家たちは、朝鮮を舞台にしてその社会情勢や革命運動とその周辺を描く（金達寿「玄海灘」「朴達の裁判」、金石範「鴉の死」「火山島」、李恢成「見果てぬ夢」等か、在日の煩悶と日本社会の不当性を表現したもの（金泰生「骨片」「私の人間地図」、金石範「祭司なき祭り」、金鶴泳「凍える口」等）であつた。それが李良枝の場合は、在日朝鮮人二世の若い女性が韓国で受けるカルチャーショックを背景として初めての小説であつたからである。在日朝鮮人二世の韓国での煩悶と葛藤を李良枝は書き続けた。言わば李良枝の描いた煩悶と韓国社会でぶつかった壁は、それまでの在日朝鮮人作家たちが求め続けた「属性」からの圧迫であつた。（中略）

ところが、李良枝の「由熙」が指し示したものは、在日朝鮮人が朝鮮人としての民族的な特質をすでにかなりの程度まで失っているという前提に立っている。当然「祖国」であるはずの韓国や、母国語であるはずの韓国語からはねつけられる。

由熙が母語でない母国語の氾濫した韓国から逃れ、母語である日本語の世界に浸りたい気分に陥るストーリーは不思議なものではなく、一般的な傾向と言える。

文学はもちろん政治組織からも自由でなければならない。しかしそれは個人として強い政治性を獲得した上で文学に従事するということを否定するものであつてはならない。李良枝とは逆に在日朝鮮人文学者が朝鮮語で文学創造する場合は、非常に強い民族意識を持たなければならない。（下線筆者）

李良枝の文学方向性についての林浩治氏の見解の当否はともかくとして、彼の指摘した「政治性」や「民族性」という言葉は、やはり見逃してはならない\*2。なぜなら、在日朝鮮人二世をとりまく環境は、とりわけ「民族性」と切っても切れない関係にあるからなのだ。この問題は、たとえば在日朝鮮人の世界では、「一等朝鮮人」「二等朝鮮人」「三等」「四等」といった身分制にまで反映されている。帰化した在日朝鮮人作家の深沢夏衣に『夜の子供』（講談社、1992・12）があるが、その中で登場人物ウチョルは、「在日」の身分について諧謔的にこう語っている。

「たとえば俺たちには四等までの身分制度がある。一等は民族的主体性をしっかり持っている主義者で、もちろん朝鮮語のできるやつ、二等は主体性はあるけど朝鮮語のできないやつ、三等はそのどっちも欠落しているが、国籍をちゃんとしているやつ、四等は帰化したやつ、という具合にね。（中略）その上、一等朝鮮人は、北だ南だと互いの民族的主体性の正しさについて争っている。これが俺たちの姿なんですよ。日本人から見れば、一等も四等もくそもない、みんなただの朝鮮人なのに……」

「ウチョル、朝日混血は何等人間だ？」（中略）

「混血なんか物の数にも入ってないさ。彼らがどんな思いでいるなんて、誰も考えてみようとしません。混血は透明人間だよ」

「民族的主体性」の有無は、いわば在日朝鮮人のアイデンティティーをはかる物差しとなっている。だが、現実問題として在日朝鮮人たちにとって国籍取得は、むしろ彼らの選択を迫られる生活上の大問題である。その現実、彼らを取り囲む政治社会の百面相をも反映している。なぜなら「在日」の背後には、つねに「北」と「南」という国家権力の存在があるからなのである。つまり、どっちも「在日」の国籍を国民として国家体制に組み込もうとするわけである。最近、在日朝鮮人作家金・石範<sup>キム・ソクバン</sup>は、同じ在日朝鮮人作家李恢成の韓国国籍の取得をめぐる、「李恢成君への手紙」\*3の中で次のように語っている。

いったい「在日」のわれわれにとって国籍とは何なのか。戦後一九四七年に実施された外国人登録の国籍欄に、現在の韓国籍をも全部ひっくるめて在日朝鮮人全体を「朝鮮」として記載したのが始まりで、いわば記号だった。一九四八年、南・北分断政府の樹立後、一部が「韓国」記載になり、日本と韓国との国交正常化とともにそれが「国籍」化し、残りが「朝鮮」のまま今日に至っているが、……（中略）

「在日」の場合の国籍選択は生来的な日本ではなく、海の向こうの分断祖国の一方を取るためにつねに南・北政治の渦中で翻弄される。いずれやってくる不可避的な南・北国籍選択に先立って、君は朝鮮籍から韓国籍を取得した。（中略）

君は生来的な韓国国民ではない。在日朝鮮人。絶対多数の韓国籍五十五万、朝鮮総連系十五万の外にある絶対少数のはっきり無国籍になるだろう朝鮮籍だった。そして君も十五万の朝鮮籍のうち毎年韓国籍を取得している四、五千人の一人だということであり、この勢いは一つの時代の流れでもある。（中略）

在外朝鮮人の分断祖国の一方の国籍上の帰属を求めない者たちは、ディアスポラ（離散）ということか。比較できることではないが、ユダヤ人のディアスポラには二千年の歴史があり、われわれに国籍選択を迫り得る祖国は統一されるべきものとして、玄界灘の向う

側にあるのだ。(下線筆者)

李恢成は「在日」の作家として、ずっと「在日」の存在について独自の論調を主張してきた一人である。たとえば、1996年に詩人金芝河との対談の中でこう語っている。

「在日」という存在は、時には日本から疎外され、また南北朝鮮からも時には継子扱いされる存在でもあります。人間としての存在価値と真価をつねに試されている、困難ながらも貴重で独自の存在なのです。\*

李恢成は日本で活躍している作家であるだけに、彼のアイデンティティーの帰属が在日朝鮮人の世界で注目されるのは当然である。一方、金石範は、民族統一の日が到来するまでは分断祖国の一方の国籍上の帰属を求めない「在日」の少数者であり、いわばディアスポラとしての「在日」の在り方を選んでいる。しかし、いずれやって来る祖国統一の日を待ち望むと同時に、玄界灘の向こうにある「祖国」への眼差しはやや不安である。「祖国」と呼ぶ言葉は実に重苦しい。

李良枝も帰化した在日朝鮮人の一人である。在日の「身分制」から言うと、彼女は「四等朝鮮人」に該当する。李良枝(戸籍名「田中淑枝」)は、山梨県富士吉田市生まれ、九歳の時に両親の日本帰化に伴って日本国籍に入籍することになる。不幸にして両親の関係は淑枝の小学校時代から悪くなり、その後は別居、離婚訴訟が相次いで起こり、とうとう彼女が高三を中退し家出をすることまで発展したのである。その後の淑枝は、波乱万丈の生涯を始めた。民族意識に目覚め、みずからの日本名を朝鮮名「李良枝」に戻し、「日本人」になりきろうとする父の志向に背反する志向をもって、「朝鮮人」としての属性——自己の在り方を求めようとした。家出をしたあと、京都の旅館での皿洗い、東京での在日同胞グループの活動参加、そして「丸正事件」(獄中にいる在日朝鮮人一世である李得賢)の救援運動、伽倻琴(カヤグム——民俗楽器)との出会いを通じて、彼女の中の<朝鮮>像が幾重にも重なっていく。

以上のことがらをふまえた上で、まず戦中、戦後を駆けぬけた李良枝の父親の来日の経緯を考察し、そして家庭の不安にさらされた李良枝の家出、その後の彼女の生活軌跡をたどりながら、「日本

人」になりきろうとする父親の志向に背反する李良枝の「朝鮮人」の志向を検証する。これを通じて、「朝鮮人」としての李良枝の在り方、および伽倻琴の音色に心酔する彼女の、祖国に翔ける夢について考えてみたい。

## 二 「日本人になりきろう」

李良枝の父、李斗浩(戸籍名「田中浩」)さんは、昭和元年に当時の日本支配下の済州島に生まれる。昭和8年、漁民だった彼の父親は「内地(日本)」へ出稼ぎ、昭和15年に十五歳の李斗浩さんは、「君が代丸」に乗って父のもと(三浦半島)へやって来た。日本へ来てすぐ列を乱した彼は、憲兵に殴られたこともある。「朝鮮人は殴らないとわからない」とまで言われたのだ。憲兵の拳で、日本に対する彼の考え方は変わったという。そのころから、彼は二日に一回くらい、映画館に行って映画を見ながら日本の挨拶や礼儀作法を覚えたのだ。その後、二年間尋常高等学校にも通った。

太平洋戦争が始まると、李斗浩さんは食料運搬船の軍属として父親と共に南洋に向かった。親子同士が同じ船に乗ってはいけなないので、別々に分乗し南洋に向かって出発した。昭和18年、李斗浩さんがパラオ島にいたとき、父親は乗っていた船がトラック島で撃沈され戦死した。そのころのことについて田中浩氏は、次のように語っている。

昭和17年に大東亜戦争が始まると、わたしは軍属としてマグロ船に乗り、南方に行きました。戦後、トラック島で戦死した父の遺骨とともに、一時済州島に戻ったんですが、周囲の反対を押し切って再び日本に來たんです。思い切り仕事がしたかったし、日本人の「義理」や「人情」にひかれていました。浪花節の世界ですよ。

戦後、山梨県富士吉田市に6畳のアパートを借りて、織物の仕事を始めました。織物を担いで、北海道から九州まで行商に行ったものです。そして昭和23年に結婚しました。そのころはもう、韓国人だというだけで、全然だめですからね。信用がないし。なんとか日本の習慣を身に付けて、日本人になりきろうとしました。終戦後も徳川家康や豊臣秀吉、織田信長の映画を見て、礼儀作法や歴史を勉強しました。

それでも、なかなか認めてもらえない。本当に頭にくましてね。浅草で働いていた従兄弟の力を借りて、劇団の興業をやったんです。富士吉田の劇場を借りてましてね。名を売ることが目的でしたから一度きりのつもりでした。けれど、その興業がうまくいったものだから、みんなから「今度はいつやりますか」なんて

言われましたよ。

この興業で結局30万円損しましたけれど、支払いなんかはきちんとやったから、名をあげることはできました。田中さんは“芸術”もやっていたんだ、23歳の若さで大したもんだと。それから、「田中さんはまじめだし、信用できるから委託販売で」って、まわりの態度はガラッとかわりましたよ。それからがんばって、25歳の時に家をたてました。今まで、たくさんの不動産も持ちました。とにかく、日本人になりきろう、なりきろうと必死でがんばったんです。(中略)私が帰化したとき、娘の淑枝(芥川賞作家故李良枝氏)は9歳でした。淑枝は帰化した私に反発し続けていました。しかし、時を経て、私が韓国を忘れたわけじゃない、日本で生きていくために日本人にならざるを得なかったんだということを知り、ようやくわかりあえた矢先、あんなことになりましたから。ちょうどWe're 創刊の直前でした。妹のさか江と一緒に4か国語の本を作ると聞いて、私も力になろうと思っていました。/We're は、淑枝を供養する意味も込めて、なんとか続けていってほしいと思っていました。(下線筆者)\*5

「政治には関係したくない。少しでも左だと思われと、銀行は金を貸してくれなくなる。お互い早く握手をして欲しい」と、商売第一の生き方を選んだ田中浩氏は、東京、山梨や千葉に土地を増やしてホテルやレストラン、ゴルフ場など経営してこれまでに五十何億円の個人資産をつくってきた。山梨県富士吉田市の納税額長者番付の中で、田中浩の名前が知られるようになったのも、戦後まもなくのことだった。納税額、そう、これこそ朝鮮人が日本で暮らしていく「パスポート」なんだと、田中浩氏は筆者に語ってくれるのである。一方、在日朝鮮人における不毛の民族的アイデンティティーの問題をめぐる争いや政治的対立は彼とは無縁だった。「わたしは朝鮮人」の中で、李良枝はその両親についてこう語っている。

父は十七歳の時に朝鮮から日本に渡ってきて母と結婚し、裸一貫からようやく並の生活を築きあげつつあったころだった。しかし、私が生まれるほんの少し前までは、唯一の寝ぐらが駅のベンチだったというほど、その生活は貧乏きわまるものだったという。田舎であり、親類縁者もいないところで、どこかの馬の骨ともわからぬ朝鮮人夫婦が、何の差別も迫害も受けずに過ごせるわけがなかった。父の腕の傷はいまでも父自身、思わず顔をゆがめるほど、私が想像するに余りある何かを鮮明に物語っている。

父母はそれ以来、日本の文化・生活に少しでも迎合し、日本人からの信頼を得ることがこの日本の地で生きていくためには不可欠だと考えて、つとめて日本式の生活になじみ、また子どもたちへも日本人としての教育をほどこしていった。\*6

李良枝の父親は、日本国民の習俗を遵守する模範的な在日朝鮮人の一人である。富士山を背景に建てられた、日本庭園のある六六〇平方メートルの日本式の家屋に一家が住み、そして日本文化・生活のマナー(生け花、日本舞踊、琴)を娘に身につけさせ、日本的な女性として育てようとしたのである。その願いは、やはり「朝鮮人」から脱皮して「日本人」になりきろうという夢に基づいている。生活様式、子供教育の面で日本の習俗をすべて取り入れることは、ある意味で日本人よりも日本的な「国民化」の志向だったと言える。しかし、その志向は、決して個人的な好みの問題ではないと思われる。好むと好まざるとにかかわらず、そうせざるを得なかった。それ以外に方法がないのである。

国民化(文明化)は、たしかに日本における近代的な<国民国家>形成のための重要な政策だった。とくに<闇>の世界=植民地から「内地」へ、言い換えれば<非世界>から<世界>へやって来る朝鮮人たちは、征服者の地で言語、服装、挨拶、儀式といった日本国民の習俗を遵守し、それに服従しなければならなかったのだ。つまり、日本国民の生活に適応できる身体と感覚を持たなければならない。逆に言えば、日本の植民地統合は、同化政策として現地人に対して時間・習俗・身体の日本文明化を強制したのである。ここで、そんな自分をめぐる生まれの環境について李良枝の語った言葉を見てみよう。

私が育った地域は典型的な日本の田舎町だったうえ、近所に韓国人が一人も住んでいなかったのも、一年に一度くらい訪れる機会があるかなしの大阪との距離は遠く、自分が「韓国人」であることをほとんど意識しないまま子供の頃を過ごしました。また父と母も、日本の社会、ことに閉鎖的な田舎町での生活や風習に順応するために、皮肉な話ですが日本人にもまして日本人らしく暮らすことを、外面的にも内面的にも強いられていたように思います。

キムチというものを一度も口にすることもなければ、韓国語を耳にする機会などまるきりない環境のもとで育ちながら、時たま訪ねていく大阪の親戚たちの存在と韓国人がたくさん住んでいる町の風景とのつながりを、自分でもそれと気づかぬうちに次第に恥ずかしいもの、あるいは隠しておかなければならないことと感じるようになったのが、果たしていつごろからだったのかについては正確に思い出せません。(中略)

父と母は、私が九歳のとき日本へ帰化しました。当時はいと違って、帰化の手続きがすごく難しかった

ことを思うと、父と母にしてみれば子供らの将来のために、より模範的な日本人であることを日本政府に証明し、また誓わなければならない考えから帰化したと見ることができるでしょう。/しかし、私にとって日本の国籍を持っているという事実は、精神的に何の助けにもならなかったし、また何の解決にもなりませんでした。(「私にとっての母国と日本」)\*7

「在日」とは、日本の内にあって<外>であり、母国にあって<他者>である。よそ者として扱われる「在日」は、日本に帰化＝同化しないかぎり、内にある<外>、<他者>として異郷の地に留まるしかない。「日本人」になりきろうとした田中浩氏は、しかし心の中では自分は朝鮮人であることを一日も忘れたことはない。十五歳で「内地」へ、そして南洋で父親を失い、戦後、絹織物の行商人として北海道から九州まで歩き回り、底辺を舐め尽くした田中浩氏の苦労は、人に語りきれものではない。五人の子供のうち三人を失い、子供たちの母親である妻とも離婚した彼は、今は日本人の妻と二人で千葉に住んでいる。

「あのころは、帰化しなければ、日本で食べていけなかったんだから。けど、今のわしは南とも北とも協力したくはないな」と、きっぱりと筆者に話してくれる田中浩氏は、毎朝、家近くの浜辺を散歩しながら、時々朝鮮語で唄を歌う。うたごえは、浜辺を洗う波に呑み込まれ、海へ流れていく。だが、「烏賊の瞳の潤みて海に向き干さる」という気持ちは、やはり変わっていない。それは、すべて在日朝鮮人たちに共通するものであろう。

### 三 壊れていく家庭

車は中央高速道路を疾走し、河川湖畔に向かった。父はひとりでしゃべり続けている。前方に車はなく父の手はハンドルを固定させたままだ。父が待ち伏せ、河口湖に連れていかれる日は、不思議に思うほど、いつでも富士山が青く澄んだ空を背景に前方に泰然と聳えている。

「君にこんな話はしたくないんだが」

父は話の区切りごとにそう言い添える。私はそのたびに富士山を睨む。固定されたハンドルを横から思いきり動かせば、富士山も消え、父の話も消え、私も消えることができるだろうか。

「済州島の女は無教養なんだよ。結局ね、男を男と思わないんだ。君にこんな話はしたくない。だが……どうしておとうさんとおかあさんがこんな風になってしまったのか、君がわからなくちゃ。君たちがわからな

いまだとおかあさんのようになってしまふんだよ」

父は涙をすすりながら私の横で話し続けている。父は自分の声の抑揚に没りきり、弾みのつく哀しさに酔っているようだ。富士山を睨んでいた私の目も潤みだす。どうしてこうなのだろう。母に対してもそうなのだ。聞いているとどちらが悪いのか解らなくなってくる。淀みきった密室の空気が重く身体を締めつけ、歯痛にも似た苛立ちの中で、富士山はぐらぐらと歪み始めた。

ひしひしと緊迫感と切迫感が伝わってくる上記の文は、李良枝のデビュー作『ナビ・タリオン』からの引用である。李良枝自身の「私」的体験をふまえたこの作品は、彼女が韓国に留学した頃に書き上げ、心構えは遺書を書くつもりだったが、結果として、一人の新しい世代の在日朝鮮人作家を誕生させる決定的な一作だったのである。

「固定されたハンドルを横から思いきり動かせば、富士山も消え、父の話も消え、私も消えることができるだろうか」と、「私」(小説の中の主人公・愛子)は、自分を含めて生きているこの世界を消そうとする。「私」は、ほとんど毎日富士山を見ていながら成長してきたと言っているが、心の襖には、不幸にして「自然」の不調和が刻印されていた。自然な富士山の雄姿と、心の中に重なってくる富士山のイメージとがぶれている。故郷と呼ぶ「富士山」という言葉は、彼女にとってどんなに重苦しいものだったろう。父と母の関係はどうなっていくのだろうか、子供の自分たちはどうなるのだろうか、そのうち自分は……、といった存在の不安にさらされた「私」は、恐怖のどん底に落ちてしまった。一方、前方をじっと見つめ、ハンドルを握ったまま、車を疾走させる父親の姿は、ある意味で象徴的に彼の生き方そのものを物語っている。

文学は、無限の出会いの場を生み出す創造的な表現行為である以上、「作品は、なによりも作品と作家との関係の特権化する」\*8のである。本稿に引用した李良枝の小説の一節は、ただ単に作者自身の幼少時代の思い出を語っているに止まらず、より重要なのは、家庭の問題(大人/子供、夫/婦)が人間の生の世界における出来事として描かれているということである。われわれがそこから読みとれるのは、対立、反目、無視、憎しみといった父親の母親に込めた感情の露出である。そして、

怯える子供たちの不安……。

このように、作品のレベルで表現されているのは、「私」の存在からの不安、疎外そのものである。それに、壊れていく家庭の予感。いずれやって来る家族の崩壊に出会う「私」の生きているこの世界が無意味な、非情な到来の出来事として綴られている。すなわち、人間の生という不条理の世界が作品に提示されている。

李良枝は、両親を含めて兄二人と妹二人の長女として七人の家庭に生まれ育った。残念ながら、彼女の小学校時代からすでに両親の不和が始まった。その後、東京に事務所を持つ父と兄二人、山梨に取り残された母と姉妹三人、といった具合に、家はまっ二つに分かれてしまった状態だった。淑枝の高一（1972年）の時から始まった両親の離婚訴訟は、なんと延々と十年間ほど続けられていて、1982年にやっと終止符を打ったのである。その前の年、前々の年、二人の兄が病気で相次いで亡くなった。

高校卒業の直後に李良枝が書いた「わたしは朝鮮人」という手記の中で、両親の離婚問題についてこう問いかけている。

家では憂うつであった。両親の不仲は久しく、じりじりとくすぶりつづけていた。それは私が小学校五年、ちょうどいちばん下の妹が生まれた時、一時静まったかのように見えたのだが、相変わらず陰湿な空気が家中をとりまいていた。けんかなら思いきりやりあって、その後さっぱりとしてほしいのだ。何度も何度も離婚の話が出て、そのたびに親族会議が開かれるのだが、子どもたちのこと、その他さまたげなことが障害になって、何の解決もなされないまま妥協を繰り返していたのだ。 (中略)

夫婦とは何なのだろう。二十数年間、二人でたどってきた歴史をお金をもって清算するということ、そして、同時に子どもも。いったいどういうことなのだろう。悲しい疑問ばかりであった。

そのような時に、父は私たちと会うために、学校が終わる時刻をみはからって校門で車に乗って待ち伏せていることがよくあった。まったくおかしい話だ。しかし、私はむげに父の行為を拒むことはできなかった。妹たちを迎えにいった、いっしょにドライブをしながら食事をした。母には秘密で、そういうことが一ヶ月に三回ほどあった。車に乗っている間、妹たちは父をあからさまにとがめながら、感きわまってよく泣き出し、私も「どうして私たちを生んだのか!」といわんばかりに、恨みつらみを泣きながら訴えた。家庭内の空気は絶望的であった。

これらの文字は、一つ一つ肺腑をつく言葉なの

である。なぜそうだったのだろうか。小、中学校時代からずっと成績優秀で明朗活発な淑枝は、高校に入ってから暗い家庭環境ですぐれず、勉強もせず学校もさぼるようになって成績が下がる一方だった。「家に帰っても状態は少しも変わらず、暗いほら穴で何をするとということもなく、ただ黙りこくって生きながらえている小動物たちを思わせる光景」（「同前」）といった有り様だった。

山梨県富士吉田市の広報誌『ふじよしだ』特集号——「芥川賞作家 李良枝さんをしのんで」<sup>9</sup>の中で、李良枝の「少女時代」について次のように記されている。

李良枝は、昭和三十年三月西桂町で在日韓国人である父、田中浩さんの長女として誕生。その後、三歳の時に富士吉田市下吉田（月江寺の池付近）に転居。九歳の時、日本に帰化し、日本名を「田中淑枝」となりました。

下田第一小学校、下吉田中学校を卒業、県立吉田高等学校三年の途中で、父親が日本に帰化したことに反発し、京都府で別居生活を送りました。

中学校生活の記録によると、九教科の成績は抜群で、副級長、文芸クラブ、新聞委員として活躍。また、郷土開発作文コンクール県下三席の賞、読書好き、作詩・習字が得意で、日本舞踊、バイオリン・ピアノ演奏など、個性的な趣味・特技を持っていたそうです。自分の得意とする場では、人の先に立って活躍し意欲的に取り組みましたが、個性が強く協調性に欠けていたなど、ごく普通の中学生だったようです。また、目立った存在ではなく、家に帰ると、「読書好きの彼女は、手当たり次第に読みふけていた」と、友人たちは日々話してくれました。このように多感な少女時代のおよそ十五年間を本市で過ごされました。

そんな多感な少女時代を過ごした淑枝は、しかし暗い家庭環境の中で、不幸にして自分の生きているこの世界に対して、ある名状しがたい恐怖感を覚えるようになった。存在からの不安、疎外、これらが、のちの作家李良枝の文学に通底するものとなっている。

私は人が黙っていることがたいへん恐ろしかった。何でもいいからとにかく笑ってくれていれば安心できるのである。(中略)暗い家庭環境にはぐくまれた私の当然の産物だと言えばそれまでなのだが、現在もそのような自分に悩む時、私は小、中学校時代のまったく陰と陽の生活を思い起こすのである。

私は、父と母の間にいる時、たえず身の置き場のない自分と、そしてたえず私を圧迫する何かを感じずにはおれなかった。そのくせ空気の重さ、父の沈黙が何とも言えぬほど悲しく、その上恐ろしいものであったから、まったくつまらない話をして始終道化ながら、その瞬間を通り越せば一人でホッと胸をなでおろすと

いう具合だった。

父が久しぶりに帰ってくる。母は口もきかない。黙々と食事をして、その後のテレビを見ている時、父は姿勢をテレビに向けながら、じっとこわい目で母をにらんでいることを、私は知っていた。心はひねくれ者のように上目づかいをしながら、「おとうさん、きょう学校でね……」と一生けんめい話しかけた。笑ってほしかった。何でもいいから口をきいてほしかったのだ。そうした気づかいも、している瞬間は何やら胸がいつぱいで、さほど苦痛ではなかったように思う。しかし、部屋に戻って一人きりになると、こみあげてくる嫌悪感はどうしようもなかった。ああ、このような気づかいには耐えられない、父母の罵言のあびせ合いはいつまでつづくのだらうと、朝まで眠れず泣きあかす夜があった。（「わたしは朝鮮人」）

勉強がだんだん嫌になってきた淑枝は、高二の一学期の終わりに、自殺をはかったが、未遂だった。この事件が発生したあと、学校に通い続けるのも精神的に苦痛になってきて、とうとう「学校をやめて働く」と母に言った。母は、あと一年だけなのだから、がまんしてくれ、と淑枝を説き伏せようとしたが、淑枝は自分の主張を譲らなかった。三学期が始まった二月初旬の寒い日、「私は、このままでは、生きている意味がありません。学校を退学して、自分ひとりで、いちからやり直してみようと思います。心配しないでください。さかちゃん、お母さんのこと頼むね。わがままな姉を許せ」（カマーゴさか江「李良枝姉」より）<sup>\*10</sup>といった内容の手紙を封筒に入れて、それを居間のちゃぶ台の上に置いたまま、淑枝は貯金三万円をもって早朝家を出た。一人で京都の旅館で十日間泊っていたが、とうとう金は使い切って途方にくれて、家に戻ったのである。

「私たちは朝鮮人だし、いくら勉強しても、いい仕事にはつけないんだから、こんな田舎を出て働くわ。でも、お父さんのいる東京にはいきたくない。京都で生活する。あそこには、文化があるし、私たちのこと知っている人は誰もいないもの」（「李良枝姉」より）と、京都から戻った淑枝は母や妹に言う。一ヶ月後、母の知人の紹介で、淑枝は京都の旅館で住み込みという条件で働くことになった。こうして、淑枝は進級したばかりの高三を中退して、京都に向かった。その後、彼女は旅館で働きながら、編入生として京都鴨沂高校に通った。

そのころの淑枝について、妹のカマーゴさか江

さんは、次のように語っている。

両親の話をする以外は、私たちは仲のいい姉妹だった。私が中三になって、修学旅行で京都に行くことになり、一年ぶりで、私は姉の顔を見ることができた。田舎にいたころに比べて、ずいぶん大人っぽくなった姉を見て、うれしいような、悲しいような気持ちだったことを覚えている。（中略）父は月に一、二度、妹と私に会いに、学校の校門まで車で迎えに来て、籠坂峠のレストランで食事をし、家には寄らず、東京に帰っていく、というパターンを繰り返していた。今度は母の悪口に加え、問題児、姉のことも愚痴りはじめるようになったのだ。大好物の海老フライの味は、いつも涙でしょっぱかったのを覚えている。（「李良枝姉」）

崩壊した家庭は、いわば地面にかけた水のようにもとへ戻ることがありえない。無間の底に突き落とされた幼い三人姉妹は、来る日も来る日も両親の喧嘩に怯えていた。家庭は、彼ら親子の睦まじい対話の場でなくなり、怨みつらみを訴える場と変わったのだ。その壊れていく家庭、大人のイメージ、そして自分を育ててくれた「ふるさと」について、李良枝は次のように語っている。

私は田舎の高校を二年で中退した。そこに生まれ、十七年間育った「ふるさと」に、私は今日まで一度も愛着や懐かしさを覚えたことがない。家の二階の窓を開けると富士山が真近に聳え、近くには観光客のたえぬ富士五湖がある。だが私は町の周辺の地名さえろくに覚えようとしなかったし、行って遊んだ記憶もあまりない。親類縁者もいないこの土地を父がなぜ選んだのかはわからないが、地縁的にも血縁的にも私一家は“よそ者”だった。その中で、“よそ者”の私は、小学校の頃から「ふるさと」から出て行くことを渴望していた。私には、居を定めるとか、根をはやすといった生活への志向がどこかに欠落しているかもしれない。いまさらのようにそんな自分を考えさせられる。私の中の「ふるさと」は大人たちの顔、顔、顔でひしめきあっている。雪をかぶった富士山の冷厳な威容も新緑鮮やかな山々の風景もなぜか遠く、それらは「ふるさと」の単なる装飾物である以外、私には何の感慨もない。

両親の不仲、別居は物心ついた小さい私をたえず揺さぶった、瓦礫が崩れては積みあげられ、実に些細な風雨によってまた崩れ落ちる。いつの間にか私の家庭のイメージは微塵粉灰に散っていた。（中略）両親のあびせ合う罵言が結局、結婚したことへの後悔につながっていくのを感じるたびに、私は子供である自分の存在のやましさを考えずにはいられなかった。それは悲しい疑問だった。精神のつながりのない血縁関係なんて形ばかりの楼閣にしかすぎない。それは愚かで醜い幻覚である。（中略）大人たちの作り出す生活の流れ、了解ずみの演技に私はたえられなかったのである。（「散調の律動の中へ」）<sup>\*11</sup>

淑枝は、じつは兄妹の中で父から一番可愛がら



れた。彼女を日本的な女性に育てようとした父の願いで、日本舞踊や琴、活け花を習わせ、一方、お利口な淑枝も、いつも良い成績で父の願いを果たしてきた。娘を純粋な日本的な女性として育てようとする父の願いと、「日本人」になりきろうとする自身の夢とが合致した。そう思ったばかりでなく、実際の行動でそのように実現させようとしたのだ。だが、その夢は悲しい物語でもあった。

かつて筆者は李良枝の父親に会った際に、淑枝さんの家出について訊ねてみたが、田中浩氏は、「言うのと恥ずかしいことだけど、妻との離婚騒ぎ、あとは、うん、帰化を理由としてあげられるんじゃないだろう。淑枝が家を出たあと、まる五年間、娘との間に全然対話がなかったんだ。あのころは会うと、必ず口喧嘩になったんじゃない」と涙ぐんで語ってくれた。

「日本人」になりきろうとする田中浩氏は、「朝鮮」なる身体をもって日本人の前で「日本人」を演じてみせる。そして、娘を純粋な日本的な女性として育てようとするため、生活の中の朝鮮文化を切り捨てていた。日本人になりきろうするためには、そうせざるを得なかった、それ以外に方法がないのである。しかし、切っても切れない自分の「朝鮮」なる身体と、同時に苦労して身につけた日本の礼儀作法などが介在する生活の中で、どうしてもかみ合わない部分がその身体に現れ、言動や感情面での歪みを生じたのではないか。「済州島の女」は「無教養」などだとする考えは、まさに準日本国民志向からくる「文明人」の志向によるものと思われる。換言すれば、＜文明＞の＜野蛮＞への蔑視、そこから無意識的に「済州島の女」への軽蔑、反目、無視、ないし憎しみが身体に植えつuitたのではないか。そのようにして生じてきた生活や感情面での破綻が夫婦関係を悪化させ、その後、別居を経て離婚訴訟へと発展していったのであろう。

鴨沂高校を卒業後、家に戻った淑枝が、まず自分の名前を朝鮮名「李良枝」に戻し、そして「そんな日本に帰化したオヤジを許さない」と糾弾するのは、京都から帰ってまもなくのことだった。この親子二人は、一人は「日本人」になりきろうと考え、もう一人は「朝鮮人」としての自己を取り戻さなければならないというところが異質であ

ると、言うにとどまらない。二人の志向は、両者が共に＜外部＞＝同化しえない領域を内に抱えているという点では類似性を持つものだろう。ところで、必死で「日本人」になりきろうとする父親の志向に対して、李良枝はまさに民族的アイデンティティーの問題から、「朝鮮人」としての存在論的な異議をつきつけたのである。一家を襲う出来事としての両親の離婚騒ぎ、そして根底から父の夢を揺るがす李良枝の逆襲は、それぞれ家族の過去の物語の中で熾烈に展開していた。

#### 四 「内なる朝鮮人」

李良枝の母親吳永姫<sup>オヨンヒ</sup>さんは大阪生まれで、幼い頃の淑枝は、母に連れられて大阪にある母の実家に行ったことがある。次の文章は、李良枝が母方の実家について語った唯一の光景である。

排泄物の汚臭が鼻をつく大阪の長屋の奥。万年蒲団から起きあがったハラボジ（祖父）は、ぼろぼろになったハングルの辞書を一日中めくっていた。ぶ厚く曇った老眼鏡、しみだらけの大きな手。久し振りに遊びにきた幼い私を抱き寄せては、臭い吐息をふきかけながら、アーヤーオーヨを何度もくり返した。私たち一家だけが一番遠くに暮らしていたためか、遊びに行った時の親戚の騒ぎようといったらなかった。長屋の続くごみごみした町並も、床のへこんだ狭苦しい部屋も、養豚場も、小さな私には何でもないことだったのだ。その異質さを物珍しさとして喜び、遊ぶことだけに無心でいられた。（「散調の律動の中へ」）

汚臭の漂う長屋、万年蒲団、そして臭い吐息は、李良枝の記憶にあった祖父のイメージとなっている。そこが、日本の中の「朝鮮」、大阪生野区の朝鮮人居住区にあった祖父の「家」の原風景である。「アーヤーオーヨ」と、ハラボジが朝鮮語の基本母音を幼い孫に聞かせるのは、ある意味では、自分たちが朝鮮人であることを忘れさせないようにするという、ハラボジの無意識からくる意識的な行為だったのかも知れない。

大阪生野区の朝鮮人居住区の旧地名は、もともと「猪飼野<sup>いかいの</sup>」だった。そこに暮らしていた在日朝鮮人作家たちは、猪飼野をめぐる多くの作品を書き残している。金時鐘「猪飼野詩集」、宗秋月「猪飼野タリョン」、金蒼生「わたしの猪飼野」、元秀一「猪飼野物語」などがある。また、開高健の小説『日本三文オペラ』は、そののアパッチ族の乱

闘ぶりを取材して、日本文学の中ではじめて在日朝鮮人の世界をとりあげた特異な作品である。

ところで、排泄物の汚臭が鼻をつく長屋に住む祖父の「家」に比べて、淑枝の住む富士吉田の「家」は、六六〇平方メートルの敷地を持つ大きな日本式的家屋であった。中には日本庭園が作られ、二階の窓を開けると富士山の雄姿が真近に見える。富士山を後景に、まるで日本景色のような「舞台」が箱庭とも言うべきこの家屋にかたどられている。そこは、いわば“朝鮮”なる身体が“日本的身体”を織りなす舞台と言っている。「キムチというものを一度も口にすることもなければ、韓国語を耳にする機会などまるきりない環境のもとで」、しかも父の願いで純粋な日本的な女性として育てられた淑枝にとっては、「アーヤーオーヨ」と吹きかける祖父の臭い吐息、強烈な汚臭の漂う長屋の光景は、どんな印象だったのだろう。この二つの「家」の光景は、なによりも李良枝の心に刻まれたく日本>とく朝鮮>の風景を物語っている。そのうち日本庭園の家屋は、父親の心象風景そのものを現していると思われる。その二つの風景について李良枝は、こう語っている。

高一の夏、AFSというアメリカ留学生募集の試験を受けるさいに、私は戸籍簿謄本を見てはっきりと自分が朝鮮人であることを知った。いやそれ以前からわかっていたことではあったが、両親は朝鮮語を子どもたちの前でめったに使わなかったし、キムチも食べなかった。それに田舎であったことから、周囲がすべて日本人だったこともあって、私に“朝鮮”なるものを感じさせるものは何一つなかったといっている。(中略)両親はそれまでの生活体験から、子どもに同じ辛苦をなめさせまいと、日本人として私を育て、私もそれに疑問を感じなかった。事実私は、日本舞踊、生け花、お琴を習い、純粋に日舞の名取りを夢みていたのであった。たまに大阪の親戚の家に行くことはあった。しかし、そこから感じるものは“文化が遅れている”とか、“汚らしい”とか、“野蛮だ”という感情ばかりで、私の方からもその“朝鮮”なるものを拒否し、自分が朝鮮人であることを無意識のうちに否定していたのである。<sup>66</sup>

自分の中の「朝鮮」の発見、それは淑枝が京都へ出てまもなくのことだった。鴨沂高校に編入した淑枝は、昼間は学校で勉強し、夜は旅館の仕事を手伝うことになっている。ある朝、淑枝は学校へ通う市電の中で、民族衣装のチョゴリを着て、大声で朝鮮語をしゃべっている一〇人あまりの朝

鮮高校の女生徒に出くわした。「わたしは朝鮮人」の中で、つぎのように記されている。

その言葉は耳のどこかずっと奥の方に残っていたおじいさんのしゃべっていた言葉であり、父母がけんかをした時に思わず出てしまった父の言葉、母の言葉であった。私はたじろいだ。彼女らは疑いもなく朝鮮人なのである。しかし、恥ずかしくはないのであろうか。すぐに朝鮮人とわかるような民族衣装を着て、すぐに朝鮮人とわかるような朝鮮語をあんなに大きな声でしゃべって……。私は胸をずんとかに打たれたような気がして、同時にまっ赤になってしまい、下車駅を知らせる「荒神口」の声を聞くと、逃げるようにして降りてしまった。

彼女らはどうしてあんなに勇ましいのだろうか。平然としていられるのだろうか、いやどうして朝鮮人であることがあんなに自然なのであろう——。一日中どきどきしながら、それらのことを考えていた。ところで、この私はどうだ。ただ隠せ、隠せと、そして朝鮮人であることを絶対認められぬものとして自分に言いきかせてきたこの私は、どうだ——。

無意識に、長いあいだ切り捨てようともがきつづけてきた問題が、意外な出来事に点火されて思わぬはやさで燃え広がっていく。衝撃であった。その日以来私は、一日たりとも朝鮮という言葉の思い起こさずには過ごせなくなった。

朝鮮語を父の言葉、母の言葉として聞こえたのは、ここではやはり二重の意味合いを持っている。このあまりにも日常的な出会いによって、自分も朝鮮人であると意識した淑枝は、それを隠そうとする自分に対し屈折した嫌悪感を覚えると同時に、民族の言葉としての朝鮮語への親近感を持つことになるのである。かくして、自分の中の「父」と「母」、および「内なる朝鮮人」であることへ直面した彼女は、その後自分自身を問わなければならなくなった。

私が九歳の時、父母は日本に帰化していくのだが、私はその行為自体を取り上げてうんぬんし、両親を責めることはできない。当時九歳だった私は、不本意にも自動的に帰化してしまったわけだが、だからといって私が朝鮮人であるということにはまったく変わりはないと思っている。父母がこの日本において、私の知らぬ重い歴史を背負ってきたことを考えれば、「帰化」という不自然な状態を強要し、私のような在日朝鮮人二世を生み出してきたのは、ほかならぬこの日本だと考えるからである。(*わたしは朝鮮人*)

「朝鮮」と「日本」、まさにこの二つの文化のせめぎ合いの中で育てられた李良枝は、戦中、戦後を駆けぬけた父親の身体に帰化の歴史性を読み取ったのである。しかし、その「読み」がもたらす

負荷は大きかった。ところで、鴨沂高校で淑枝にとってもうひとつ決定的な出来事は、日本史の片岡秀計先生との出会いだった。片岡先生は、いわば在日朝鮮人である田中淑枝を、日本と朝鮮の長い歴史の中で刻まれた「近代」という時間のトンネルへと導いてくれた道案内人である。

日本史の最初の授業時間に、片岡先生は次のようなことをおっしゃいました。「私は歴史を愛する日本史の教師として、この教科書を使って授業をしなければならないことを、たいへん残念に思っている。なぜならば、日本史を論じることは朝鮮史を論じることであり、とりわけ日本の近代史は、朝鮮史との関係を抜きにしたら成立すらしなないからだ」

先生が言われたこのようなお話を聞いて、私はすごいショックを受けました。そのときまで「朝鮮人」という言葉の響きに自分から恐れをなし、ひたすら韓国人である事実は隠さなければならないこと、あるいは恥ずかしい致命的な欠陥としてしか考えたことのなかった私にとって、先生のその言葉はショックであるよりほかにありませんでした。(中略)

片岡先生との出会いを通じて目覚めた、民族意識とアイデンティティーへの差し迫った義務感ともいえる問題意識は、もっと多くのことを知りたいという熱情と併せ、目を追って私の心の中の大きな部分を占めるようになったのです。(「私にとっての母国と日本」)

その後、淑枝が片岡先生の前で、自分が朝鮮人であることを「告白」したのは、まもなくのことだった。この告白は、ただちに言説行為には連結しないが、自分の内より外へ向けて踏み出したという点で、自己暴露の行為と言える。換言すれば、その一步は、「私は」に置き換えられた「内なる朝鮮人」に到来することであり、それと同時に、孤独を背負うことにもなるのである。

日本史の先生と話をするのは、昼休みや仕事が始まるまでの放課後に限られていたので、よく手紙を書いた。一学期の私のレポートは、どうしても感情的なレベルを脱しえなかった。なぜなら、私の前に提示される日本と朝鮮の歴史は、まさに抑圧と被抑圧の歴史であり、非条理な帝国主義の侵略とそれに対する果敢な朝鮮民族の抵抗史、血史であった。不法な侵略戦争をもってこの日本は肥え太り、現在にいたってもまだその野心達成のために粉飾をこらして侵略しつづけている。私はただ、これらの事実に見える憤りを、レポートに次々と書いていったのである。<sup>66</sup>

知的好奇心の強い淑枝は、それ以来、朝鮮歴史の本を漁るようになり、虐げられた歴史を知れば知るほど、体の中に流れている民族の血を考えずにはいられなかった。ところが、京都時代の淑枝は、自分の考えた「朝鮮人」としての主体性を、

実は被害者の立場でしか捉えなかったのである。

「わたしは朝鮮人」の中で、その問題が示唆的に示されている。

朝鮮人が朝鮮人としての主体性をもつということは“されてきた”という被害者の立場のみにとらわれて皮相的に歴史を見、怨念のみを醸成するという思考・行為からはけって生まれてはこない。私が朝鮮人であり、しかも在日する朝鮮人二世であるという客観的な状況をつくりだしたその原因と、この日本社会にあって以後私がどう生きて行くべきなのかという、自分の位置に対する認識とともに未来に向かう一つの方向性、あるいは展望を志向していくという態度によってのみ、歴史的事実は刻明に、また鮮明によみがえるのである。(下線筆者)

この文の中に、被害者の立場で歴史を見るか、自分の生き方という位置で歴史を見るかによって、歴史認識が変わるという二つの思考方法が提示されている。自分の中でこの二つの問題性を抱えていながらも、自分の生きる方向性によって歴史事実がよみがえると信じる淑枝は、政経の授業で先生から『月刊・考える高校生』という新聞を知り、東京へ行ってその新聞を発行する高文研(高校生文化研究所)をたずねた。そして、わざわざ八王子市役所をも訪問し、朝鮮文化と縁の深い武蔵野一帯を係員に車で案内してもらった。

京都にもどったあと、淑枝は50年前の関東大震災時における朝鮮人大虐殺や、「韓日強制併合」についてのレポートをまとめた。かくして、日本の中の朝鮮文化に関心を持つようになった彼女は、「朝鮮を何か身近に感じ、父をそれまでとは違った別なところで身近に思う」ほどだった。自分のあり方、「朝鮮人」としての生き方を模索し始めたのは、そのころだった。

淑枝の幼いころからの友人、山下淳子さんは、京都へ行った淑枝のことを、心に穴があいたように感じてつぎのように語っている。

小さいころからよく遊んだ仲で、京都へ行ってからも手紙のやりとりがありました。といっても頭のよい人でしたが、ガリ勉タイプでもなく、優等生タイプでもない、学校の勉強は秘かにするという努力家でしたね。

京都に行ってから日本史の先生に出会い、日本人のしたことに目を背けてはいけなさと教えられたことから、民族意識に目覚めたようです。二十歳を過ぎたころから、日本人に対する憎しみからか人を平気で傷つけることを言うようになりました。そのことが元で喧嘩をし、しばらく交際が途絶えていました。(「心に穴

がaitaように) ) \*12

「朝鮮」と「日本」、この二つの文化のせめぎ合いの中で育てられた李良枝の文学遍歴を考えるうえで、高三を中退した淑枝の「家出」は、大きな意味を持っている。それは、のちに彼女が日本を脱出し、憧れの母国に留学することにもつながっている。その後、韓国と日本を往復する運動の中で、彼女はつねにもう一人の自分と出会うのである。

すなわち、「かくある」自分と「かくあろう」とする自分の願望、その中心線のぶれの中で確かめようとしてきたもの——それが私の＜朝鮮＞であった」(「散調の律動の中へ」)。心象風景とも言うべき「私の＜朝鮮＞」像が、これからは幾重にも重なっていく。

鴨沂高校を卒業後、淑枝は働いている旅館を辞めて東京に戻った。生きていく場所を自分で探していかなければならないと痛感した彼女は、人生において新たな挑戦を始めることになる。

## 五 他者の＜声＞

李良枝の「内なる朝鮮人」への眼差しは、ただ単に内側にのみとどまらず、自分以外の「他者」である在日朝鮮人にも向けられていた。東京に戻ってまもなく、彼女は『まだん』(広場の意)という在日同胞の雑誌の事務所で朝鮮語を習いはじめ、自分の名前を「イ・ヤンジ」と読むことを知ったのである。それ以後、「李良枝」を名乗るようになった。

「李良枝」を名乗ってから、彼女にとってもうひとつ記念すべき出来事は、手記「わたしは朝鮮人」(『考える高校生の本8——青空に叫びたい』、高校生文化研究所発行、1975年)を発表したという象徴的な言説行為である。

私は在日朝鮮人二世である。現在二〇歳だが、今日までの私の歩みを語ろうとする時、自分が、朝鮮人、李良枝を名乗るようになった過程を語るといふかたちでこの手記をすすめていかざるを得ない。なぜなら、私が朝鮮人であることを意識したのは高三の時、すなわちつい二年ほど前のことであり、それ以前の私といえば、現在の自分のありようを夢想だにしなかったからである。(中略)日本という日常性の中にどっぴりとくみこまれ、祖国の棄民・愚民化政策と、そして

日本の管理・抑圧政策によって巧みにつくりあげられた同化政策は、在日朝鮮人の民族的自覚と未来への志向を抹殺し、人間本来に保障されるべき生活をも消し去ろうとするところに、その明白な意図が存在することを知らなければならない。(中略)ひらひらとは決して生きまい。何かが見えてくるまで食欲に生きてやろうと思うのだ。在日朝鮮人の一女性として——。

「ある日の時点で朝鮮名を名乗ることは、それ自体が日本総体に向けての挑戦的行為であり、自分自身に向けてのそれでもある」と、李良枝は同じ文中で語っているが、そのみでなく、朝鮮名を名乗ることは、「日本人」になりきろうとする父の志向と背反する行為でもある。雑誌『まだん』を通じて李良枝は、在日朝鮮人社会と出会ったのである。

翌年(1975年)、彼女は早稲田大学社会科学部に入学した。その在日同胞の韓国文化研究会のグループ活動に参加したかったからである。そこでは、祖国の情勢や民主的人士の決死闘争……などをめぐってよく政治討論を行なったが、その活動は長く続かなかった。

「東京に来てから私は、在日同胞の若者たちに多く出会って来た。その一人一人がそれぞれの＜朝鮮＞をかかえ、生き方を模索していた。だが韓文研で連発される祖国は、私の＜朝鮮＞のイメージとはどこかが噛み合わない、そんな気がしてならない。これほど加害者と被害者がはっきりしている歴史を知っていながら、在日同胞が分断され、いがみ合い、一つの指標を設定できない状態が続いているのはなぜだろう。」<sup>\*11</sup>

「あまりにも観念的なうえ、あまりにも政治的傾向の強い討論の連続に、まず疑問を感じないわけにいかなかったし、同時に、私が日本の国籍を持っている事実に対する同胞社会の冷淡な反応が、喻えようもない大きなショックだったと申せましょう。(中略)

私の心の中で、疑問の鎖はますます複雑に絡んでいくよりほかはありませんでした。そもそも真の意味の政治的節操というのは、国籍問題だけをもって論ずることができるのだろうか。韓国語の読み書きもできなければ母国に住んでいる韓国人の生活の実態も知らずに、一体どこに依拠して「連帯」を語り、「反体制」を呼び掛けることができるのだろうか。」<sup>\*7</sup>

韓文研のセクト主義、しかも怨念ばかりが醸成された仲間同士の民族意識に戸惑いを見せた彼女は、口先だけの「革命」を叫ぶ韓文研の活動に懐疑を抱くようになった。それから、たったの一学期で早稲田大学を中退した。彼女にとってこの中退は、彼女が在日同胞の世界に足を踏み入れた最初の躓きであると言えよう。だが、その活動を通

じて、差別と被差別の問題に対する認識を深めていた。

私は権力だとか、あらゆる特権的なものを憎悪し、軽蔑しています。差別されている者または抑圧されている者の中にも差別があり、別の抑圧があるという事実、言い換えるなら、差別されている者がある別の人々に対しては差別者にもなりうる現実**に**ぶつかり、それを自分の問題として実感した結果、私は以上のような結論にたどりついたのです。<sup>7</sup>

早稲田大学を中退した李良枝は、自分の中にある言葉と生活の距離を痛感した。もっと底辺の在日朝鮮人の生活を知りたい彼女は、朝鮮人のたくさん住んでいる地域、荒川区へ移り、その後在日同胞の経営しているヘップ工場で働き始めた。格安の家賃で駅の真裏にあるアパートを借りて暮らした。

アパートの裏の空地に洗濯物が色とりどりに並び、東武鉄道の車輛工場から間遠に金属音が響いてくる。階下に住むおばさんの東北訛りの粘っこい大声が聞こえる。彼女は銭湯でも、走り廻る子供たちにけたたましい尖り声をあげていた。歩いて二分とかからぬところに銭湯があった。銭湯はその土地に生活する人々の臭いや音、その他抑揚みたいなものを教えてくれる。<sup>8</sup>

その暮らしは、いわば日本国籍を持つ彼女が知らざる朝鮮人の生活を体験することでもある。工場は、年を取ったアジモニ四人、型をとるアジョシを入れて七人の従業員しかいない。薄暗い、シンナの臭いが充満した作業場で、彼女は慣れない手つきで働いた。劣悪な作業場の環境、社長家族と在日同胞従業員との格差、アジモニたちの卑猥な話など、そこも世間の現実とは変わらなかった。

「その場所では、その生活でしか生きていけない人々の真似をするようなことは、その人たちへの侮辱ではないのか」と、私を直接非難する者もいた。問題は生活の形なのか、それとも意識なのか。だが、形と意識は別個に考えられるものなのか。何を言われても不透明な迷いに解答はなかった。(中略)

位相の違うことでも、大人の作り出す生活の流れは変わらなかった。私は、「生活」を生きている、という人々にどこかで憧れ、かくあるべきだと、その姿を勝手な思い込みで描き、美化していたのだろうか。(中略)

この世にはさまざまな生活があり、そこで個々人が近寄りたがたい定めのようなものを、生まれた時から背負いながら生きている。多分どこに行っても人間は具体的に、それこそきわめて直裁に生きている筈である。たとえばそれがどんなに醜悪であっても……。自分はどこで生きていくのか。一体誰と生きていくのか。相変

わらず中途半端な私の放つ体臭のひどさは、その醜悪さの比ではないように思えた。このさまざまな生活の底に私は達してみたい。だが足に藻が絡みついて、その底に至る道は思っていたより深く険しい。(下線筆者)<sup>11</sup>

“かくあるべき”生活、そのような生活をしている朝鮮人に接したい、と思い描いた絵空事は、現実の前で砕かれてしまった。自分の生活の場がいったいどこにあるのか、と迷い込んだ李良枝は、生きていく場所を探し続けていく。ほぼ同じ時期に、李良枝にとって忘れがたいのは、彼女がある在日朝鮮人一世李得賢<sup>イ・ドクヒョヌ</sup>の救援運動に出会ったことである。

李得賢は、1955年にある事件によって逮捕されたあと、無期懲役で二十数年間も仙台の刑務所暮らしを強いられた。彼は終始犯行を否認し、共犯者とされたもう一人も無実を主張した。正木ひろし、鈴木忠五両弁護士は、被害者の実兄夫婦と実弟を真犯人と突き止め、自首を勧めたが、聞き入れられなかった。両弁護士は、無実の二人を救援するために真犯人を告発し、世論に訴えることまで活動が発展したが、結局、名誉毀損で告訴された。「丸正事件」は、かくして丸正名誉毀損事件を派生させることになったのである。

私が事件を知ったのは、一九七五年十二月に正木弁護士が他界されるすこし前のことだった。翌年三月、その死を待っていたかのように上告は棄却され、実質上の再審といわれたこの事件に一応ピリオドがうたれる状態となっていく。当時、李さんはすでに獄中二十一年、私は二十一歳になったばかりだった。両弁護士の書いた『告発』その他を読めば、二人が無実であることは誰の目にも明らかだった。(中略)

事件当時の新聞は、頑強に犯行を否認する李さんを「白をきる李、ふてぶてしい李」という一方的な書き方で報道している。事件現地を何度か歩く中で、私はある所でこんな声を耳にした。

「李さんが無実だとわかっていても、地元の人間がそれを声に出して言うことはできなかったんじゃないだろうか。朝鮮人の味方をするようなものだからね。それに朝鮮人だったら殺人くらいやりかねない、という偏見があるんだ」

朝鮮人だったらやりかねない、朝鮮人の味方をするわけにはいかない——。警察、検察、裁判所という密室の中でデッチ上げられていったこの事件は、こういった朝鮮人に対する日本人の差別感情に裏付けられ、正当化されてきたことを浮き彫りにしている。出稼ぎ者である上に朝鮮人であった李さんはやはり“よそ者”だった。丸正事件は単なる冤罪事件ではなかったのである、黒々とした権力の渦が一個の人間をのみこみ、

生活が内包する感情の幅も時間もさまざまな可能性も奪い去っていく、私はこの日本の権力の“巨大さ”を丸正事件で思い知らされていた。<sup>\*11</sup>

1976年の夏、李良枝は、見捨てられた在日朝鮮人である李得賢を救援するために、銀座数寄屋橋公園で一週間のハンガーストライキを行なった。この支援活動は、多くの支援者を集め、李得賢の釈放運動を繰り広げたこともあった。しかし、ハンストを終えた彼女は、名分や建前に、スローガンだけを口にして自分の生き方に屈折した嫌悪感を覚え始めたのである。次の二つの文は、当時の李良枝の心境を現わしている。

「背筋が曲がっている、喉がかわききっている。私はそんな自分に気づき始めている。朝鮮人であることが何なのかを考える前に、重苦しい排他性の前でただ隠そう隠そうと考えていた頃。だが、＜朝鮮＞を意識しただけから私の背筋は同じように曲がっていたのだ。辛辣な言葉で日本と日本人を告発し、一種の悲壮感で丸正事件を語る私の前で、道義的自負に酔う日本人は皆うなずいた。言葉と生活の距離は皮相な了解で埋め合わされ、主体性を踏まえろという前提も、馴れ合いの合言葉に成り下がっていた。あるのは切れ切れの感慨の寄せ集めと、むき出された意志だけだ。その虚々としたものに今度は自分自身が宙づりにされていくような思いであった。」<sup>\*11</sup>

「その頃の私としては、実体もなしに言葉だけを弄ぶ政治的なスローガンよりも、個別的な問題に目を向け、生き方においても特権的なものとは無縁の態度をめざしながら、実感のともなう運動を展開していく方向で自分の生きざまを確認し、また把握したいと思っていたのです。

けれども、結局のところヘップ工場での生活も救援運動も、私の民族意識と道義感ないしは精神的な主体性の模索において、満足させてくれるものではありませんでした。」<sup>\*7</sup>

犯人とされた李得賢は、いわば言葉を奪われた「他者」である。その「他者」を支援するために行なうハンストは、ある意味では示威運動でもあった。つまり、ハンストは、一種の＜象徴的な＞示威運動であり、または一種の祭典、集団的カタルシスでもある。この運動は、嫌な人物に対する敵意や、あるいは破壊の手段によって表現されたものではない。しかし、まさに＜象徴的な運動＞は、＜象徴的な場所＞（異議を唱える＜パロールの場所＞）に連結されようとする意志なので、運動のメカニズムから言えば、それは、パロールの奪取と権力とが介在する、表象の政治的力学とも言える。パリの五月革命を経験したミュシエル・ド・

セルトー氏は、メディア社会における示威運動と言語活動との関係について、次のように指摘している。

示威運動は、新しく、異なるタイプのコミュニケーション——だがそれにふさわしい政治や理論をまだもっていない——を、その運動を裏切ることしかできない同じ言語活動において表現したのである。だからその示威運動は、まだ言明にも行為にもいたらない＜ほかのこと＞を意味し、＜象徴的＞であるにとどまったのである。<sup>\*13</sup>

ここでは、李良枝の行なったハンストと、パリの五月革命の意義とを比較するわけではないが、示威運動は、その原理からいうと、公共的領域における＜象徴的＞運動である以上、相通じるところがあると思われる。したがって示威運動は、情熱だけでそれを支える理論がないと、運動そのものを持続できなくなり、運動自身を裏切ることになるのである。

一昨年、筆者は、李良枝の妹・カマーゴさか江さんのご協力で、その父親の経営している国際友好会館（新宿大久保の界隈にある）を訪れ、その屋根裏部屋に設けられた「李良枝コーナー」を拝観する機会が得られた。その時、カマーゴさか江さんは、遺品の中から李得賢の救援運動について李良枝の綴った夥しいメモや手稿を見せてくれたが、これらのメモの行間からは、事件の不透明さを感じさせるとともに、まるで迷宮に入り込んだ李良枝の面影が浮かんでくるような気がした。まさに＜象徴的な＞出来事だった。

ところで、事件の不透明さが、すなわち救援運動の挫折にともなう李良枝の自己嫌悪につながるものであると、説明するのは少々短絡的である。ここでは、やはり彼女の行動と「他者」との出会いについて考えてみなければならない。

家出をした以降、李良枝は朝鮮高校の女子生徒との出会いによる「内なる朝鮮人」の発見、日本史の先生との出会いによる民族意識の日覚め、並びに「朝鮮人」であることの告白を通じて、いわば「朝鮮人」としての自己を取り戻そうとしたわけである。そして、東京へ戻ってからの、日本名からの朝鮮名への改称、韓文研の活動参加、ヘップ工場での“朝鮮人”生活の体験は、つまり日本国籍を持つ自分とは違う世界にいる在日朝鮮人の生活をもっと知りたいという欲求に基づいたもの

である。だが、それらは「他者」との出会いとは言いがたく、厳密に言えば、「私の＜朝鮮＞」像を求めるにすぎなかった。「他者」との出会いは、やはり言葉を奪われた「他者」である在日朝鮮人一世李得賢の救援運動だった。

この事件と救援運動との関係は、言い換えれば、現実と言語活動との不適合にある。現実屈服することを欲しない言語活動は、その不適合を軽減し、あるいは是正しようとするわけである。知のレベルにある言語活動、たとえば革命的言語活動、社会的言語活動、文学的言語活動などがあるが、李良枝の救援運動に関わる言語活動は、どれに属するかが分かるだろう。名分や建前に、スローガンだけを口にした言葉は、「一種の悲壯感で丸正事件を語る私」が群衆の前で行なうカタルシス的な行為に終わってしまい、ただ単に群衆の同情を買うことしかできなかった。パロールの奪取というこの救援運動の究極的な目的からいえば、「言葉」が焦点となるが、内側に対しては強制的であり、外側に対しては威嚇的である「集団言語」は、それ自身一種の権力的な言説である。なぜなら、「権力は、……権力に異議をとねえようとする解放の動きのなかにさえ存在する」\*14 からののだ。言葉の変革もできず、ただ単に直接的な告発といったスローガンにのみ飛び交う戦闘的な言葉のむなしさに、外部の行動に止まってしまう李良枝自身の限界がつかえたと言えよう。逆説的だが、権力に対して用いられる権力的な言説は、「集団言語」に強制される危険性を孕んでいるのだ。

1955年に逮捕されて以来、ずっと刑務所暮らしを強いられていた李得賢が、1977年に仮釈放された。22年間もの闘いの生活だった。獄中から出た李得賢は、「無実をはらしたい。はれるまでこの日本を動かない」と決意した。その闘いについて李良枝はこう語っている。

闘いという言葉は、私は以前のように安易には使えなくなった。闘いとは行為であり、日々の選択とその持続を意味するものでなくてはならない。こういった李さんの生き方が私に貴重な示唆を与えてくれたのである。私はまた伽倻琴を弾き始めた。\*11

持続、この終わりのなき反復行為は、エクリチュールにおいても変わりはない。再び伽倻琴との向き合いは、一種の固執する行為であり、同時に新

たな転換の開始である。たえず転位する李良枝にとってその向き合いは、いわば位相転換を意味するものであろう。

固執するということは、要するに、漂流し待機する力を是が非でももち続けるということである。そしてまさしく固執するからこそ、エクリチュールは、転位するようになるのである。\*14

ところで、李良枝は、いつ頃から琴を弾き始めたのだろう。高校時代に箏曲部の部長にもなった彼女にとって琴との出会いは、複雑な思い出があるのである。——「琴の稽古は京都へ行ってからも休みませんでした。鴨沂高校へ通っている間に民族意識に目覚めてからというもの、途絶えがちになりました。/民族的な問題を考えるようになったのに日本の楽器にこだわり、稽古を続けることに矛盾を感じたからでした。」

伽倻琴との出会いは、実は李良枝が早稲田大学に入学した直後のことだった。「アリラン、トラジ、ノドルガンピョンと民謡を覚えていく中で、私は伽倻琴のもつ音色の幅広さとおおらかに、安心できる場所を求めていたように思う」と、伽倻琴と出会った時の喜びを語るほどだった。だが、当時の彼女は、韓文研の活動や救援運動に追われていて、伽倻琴を弾く余裕があるはずはなかった。かといって、伽倻琴は彼女から離れたわけでもない。

伽倻琴は早稲田大学を中退して荒川区に住むようになってからも、いつも傍にいて頼もしい付き添いのように私を慰め、励ます役割を果たしてくれました。伽倻琴は音そのものに秘められている魅力ばかりでなく、日本の琴を稽古してきた私にとっては祖国のイメージの象徴でもありましたし、伽倻琴と琴の構造的な違いや音の違い、技法の違いなどから日本と韓国の文化的な違いまで連想させられ、まさに、民族意識を裏づける大きな役割を果たしてくれることさえありました。(中略)

私は伽倻琴という楽器を通じて、自分なりに母国の姿を思い描き、また音を通じて母国の歴史と関わりを持ち、たくさんの祖先が愛でてきた音の中におのれの存在を投影させてみたりしながら、その頃突き当たっていたいくつかの壁を乗り越える道を模索していました。\*7

人生の幾多の紆余曲折を経て、李良枝は再び伽倻琴を弾くようになった。伽倻琴に対する親近感の増増は、やはり李得賢の救援運動を通して、「朝鮮人」としての自己を求める彼女をもっと内面化

させたとと言える。つまり、伽倻琴との向き合いは、「私の＜朝鮮＞」との距離でもあり、また＜外部＞を内に抱えている緊張感でもある。そこに、李良枝の求める「朝鮮人」としての属性が位置づけられている。こうして、伽倻琴の音、象徴的に＜朝鮮＞の音色とも喩えられるその響きに陶醉する李良枝は、母国に自分の夢を翔け、もうひとつの世界を思い描き始めたのである。

その意味で、「かくある」自分と「かくあろう」とする自分の願望、その中心線のぶれの中で確かめようとしてきたもの——それが私の＜朝鮮＞であった」と述べられる「私の＜朝鮮＞」は、李良枝にとって決して確認済みではなく、彼女にとってその問題は、終わりのなきエクリチュールの営みであらう。

李得賢が仮釈放されたあと、李良枝は比較的安定の時期に入り、伽倻琴の稽古を重ねていくと、もっと本腰を入れて母国で巫俗舞踊を修業したいという願望が現れてきた。

1980年5月、李良枝は、韓国の伽倻琴併唱の人間文化財である朴貴熙先生が李良枝の身元保証人になってくれたので、憧れの母国に留学することを実現できたのである。光州事件のさなかに、彼女は母国の土を踏んだ。もちろん、家からの脱出でもあった。

チニヤンジョ、チュンモリ、チュンジュンモリ、クッコリ、チャンモリ、フィモリ……。それでも自分の＜朝鮮＞に向かって動き続ける私の息づかいには、この間断ない散調の律動感の中で今も相変わらず不安定である。（「散調の律動の中へ」）

李良枝は、＜朝鮮＞に固執してきた。これからも、のがれ去る朝鮮から朝鮮へ、たえず滑走していく。伽倻琴との向き合い、その位相は、メビウスの輪のようなものだろうか。

## 結びにかえて

おそらく、ここで、私はつぎのように自問自答してみるべきなのであろう。なぜ、在日朝鮮人の作家李良枝を研究対象として取り入れるのか、と。

いまから5年ほど前、私は渋谷の紀伊國屋書店の店頭においてある李良枝の未完の遺作『石の聲』をたまたま手にとってめくってみると、釘付けに

なったのである。早逝した不思議な作家、かなり不安定な書き方……。それ以来、李良枝の存在は私の脳裏から離れていない。1996年5月、私の大学院生時代の指導教授が釜山で学術講演（大韓日語日文学会の主催）を行なった際に、身の程知らずにその学会に参加した私は、どきどきしながら李良枝についての発表をして汗をかいた覚えがある。<sup>\*15</sup>

発表の席上、ある韓国人の日本文学研究者から、「イ・ヤンジは、在日同胞ですし、在日同胞は、わたしたち韓国人にとって“他者”ですから。アナタは、中国人です。中国人はわたしたちにとって“第三者”なんですから、“第三者”の中国人のアナタは、韓国人の感情を理解しなければ、イ・ヤンジのブンガクを理解などできないじゃないか」といった発言が出た。「???……」、なるほど、「第三者」のワタシが、「他者」とみなされた在日朝鮮人イ・ヤンジのブンガクについて、ぜひとも本腰を入れて研究してみたいと、自分の思いを固めたのは、その時だった。あれ以来、それほど進んでいない私の李良枝研究と思うと、赤面する毎日である。

1998年6月、私は李良枝の父親とお目にかかった際に、いろいろのお話をお伺いできた。十五歳の時の来日、軍属として南洋へ行かされた親子、戦死したお父さん、そして家庭問題、淑枝の家出……などの話を伺っているうちに、だんだんと目頭が熱くなってきた。と同時に、李良枝の文学は、彼女の家庭環境、および彼女自身の「私」的体験とは切っても切れない関係にあると痛感したのである。そして、98年の夏、私は念願の地——ソウルを訪れ、八日間滞在したが、その際、李良枝の母国留学時代に生活など面倒を見てあげた三信閣図書出版社長李敏子氏にも、李良枝の生涯の友、金利恵さんにもお会いでき、色々とお話を伺った。ソウルから戻った後、私は李良枝研究となる礎を作ろうと構想を考えた。

本稿の考察は、その意味でまだ初歩的な試みであるが、この中で、まず「在日」をめぐる状況や「身分制」、および李良枝の文学をめぐる林浩治氏の反応について触れ、そして戦中、戦後を駆けぬけた李良枝の父親の来日の経緯を考察し、最後に李良枝の生活軌跡をたどって、彼女の「朝鮮人」



をめざす志向を検証した。

「朝鮮」と「日本」、この二つの文化のせめぎ合いの中で育てられた李良枝の家庭環境を鑑みるに、「日本人」になりきろうとする父の志向、それと背馳する李良枝の「朝鮮人」の志向が明るみに出た。「田中淑枝」から「李良枝」への改称は、最も象徴的な出来事だった。

「日本人」になりきろうとするその父は、「朝鮮」なる身体をもって日本人の前で“日本人”を演じてみせる。一方、家庭の中では朝鮮文化を切り捨てていた。好むと好まざるとにかかわらず、そうせざるを得なかった、それ以外に方法がないのである。しかし、切っても切れない“朝鮮”なる身体と、同時に苦勞して身につけた日本の礼儀作法などが介在する生活の中で、どうしてもかみ合わない部分がその身体に現れ、言動や感情面での歪みを生じたのではないか。前にも触れたが、「済州島の女」は「無教養」などとする考えは、まさに一種の準日本国民志向からくる「文明人」の志向によるものと思われる。言い換えれば、＜文明＞の＜野蛮＞への蔑視、そこから無意識的に「済州島の女」への軽蔑、反目、ないし憎しみが身体に植えついたのではないだろうか。そのようにして生じてきた生活や感情面での破綻が夫婦関係を悪化させ、その後、別居を経て離婚訴訟へと発展していったのであろう。

ここではこの問題は、ただ単にその夫婦二人だけの生活や感情の破綻だったと、筆者は考えていない。その破綻は、「日本人」になりきろうという志向と、「朝鮮」なる身体とが引き裂かれた彼らの身体性の疎外であり、それによって相手を差異化した結果だと考えられる。朝鮮的なものの排除は、まさに自己同一性の身体による相手の差異化のプロセスである。すなわち、＜外部＞を内に抱えている身体から鳴らした不協和音。身体性の疎外は、さらに＜国民＞として存在することを許されなかった植民地世界の闇の底に打ち捨てられた＜賤民＞たちが、一等国の＜国民国家＞、「内地」へやって来て、征服者の地で言語、服装、挨拶、儀式といった＜国民＞の習俗を遵守し、それに服従しなければならない、まさしく身体を抑圧した在日朝鮮人一世たちの証しだった。この意味で彼らにとって「家庭」とは、彼らが“日本的身体”を織

りなす舞台であると同時に、彼らの身体分裂の場でもあった。そして、そう言ってよければ、李良枝の親子世代にみられる二つの異なる志向は、何よりも在日朝鮮人一世と二世をめぐる状況の変化、および家族崩壊の兆し（とくに李良枝の家族を限定しないが、たとえば作家柳美里の家族の場合、その問題はもっと複雑な形態で現れている）を示しており、そこから誕生してくる新しい世代の在日文学は、旧い世代の文学方向とは異なる道を歩み始め、ディアスポラな存在として新たな文学の可能性を生み出すことを呈示している。

家出をした李良枝が、しかし「朝鮮人」としての自己を求める円環運動の中で体験したのは、理想と現実、言葉と生活との乖離、「朝鮮人」の存在からかけ離れた民族意識の高揚といった観念的な問題ばかりだった。勝手に思い描いた“かくあるべき”朝鮮人の生活、または“かくあるべき”在日同胞社会が、悉く李良枝を裏切ってしまう。結局、彼女は自分自身を見失い、混迷するナビ、もう一人の自分と出会うことになるのである。そのうち、象徴的な「他者」との出会いは、言葉を奪われた「他者」である在日朝鮮人一世李得賢の事件だった。パロールの奪取という目的のための救援運動は、残念ながら直接的な告発や戦闘的な言葉で空しいカタルシス的な行為に終わってしまった。だが、李良枝にとって言葉と生活は、決して了解ずみの問題ではなかった。みずから生活を体現して肉体化された言葉が、その後彼女の生活の再発見につながる。かくして、「他者」との出会いを繰り返すのを経ることによって、尋常の言葉では言い表せない自分（表現不可能性）を突破していく。

伽倻琴との出会いは、その延長上に位置づけられるべきものであろう。しばらくのあいだ疎遠になっていた伽倻琴を再び弾くようになったのは、やはり「朝鮮人」としての自己を求める李良枝をもっと内面化させるもうひとつ象徴的な出来事だった。すなわち、伽倻琴の音色、その響きに秘められている魅力に陶醉する李良枝の身体に、「私の＜朝鮮＞」像が投影されているはずなのである。しかし、やがて祖国に夢を翔け乱舞するナビ(蝶)、そんな彼女を、母国で苦悩する日々が待ち受けていたとは、おそらく夢にも思わなかったのであ

う。李良枝の目に映ってくる祖国の姿と、彼女自身の＜朝鮮＞像とがどのように重なっていくのか。この問題は、それこそ「後篇」の研究課題としたい。

「在日」の文学は、とりわけ朝鮮半島を植民地＝＜非世界＞に強いた近代日本の進める＜国民国家＞の“文明開化”の枠組みの中から産出された日本的近代の倒錯——つまり＜世界＞と＜非世界＞の同時存在（明／暗）——現前するこの倒錯が日本的近代の背理に横たわる暗部を照らす＜鏡＞的存在なのである。

文学の機能は、おそらく倒錯的な装置である。そこには、さまざまな姿が見いだされるのである。海を挟んで玄界灘の向こうにある＜祖国＞を眺め、その祖国にまつわるさまざまなイメージを語り、または父や母に対する複雑な心境を表現するのに、「烏賊の瞳」を設定しなければならぬパラドックスのうちに、これまでの「在日」の文学——＜非世界＞の闇の底にいる子供たち、すなわち＜一等、二等、三等、四等＞までの朝鮮人、ないし＜透明人間＞——の不幸は、二重に象徴されているのだ。世紀の変わり目に新たな地平線が現れそうな今日において、李良枝のような新しい世代の＜非世界＞からの、マイナーな文学におけるポスト・コロニアルな問題性は、在日文学の新しい検討となり、国境を越えていくはずであろう。この意味でいえば、皮肉なことに、幻の「国民文学」の克服は「国民文学」の志向ではなく、＜非世界＞からのマイナーな存在としての文学の出現を待たなければならなかったのである。

【注】

- 1) 林 浩治『在日朝鮮人日本語文学論』54—60頁（新幹社、1991・7）
- 2) 李良枝の文学方向性に関する林浩治の見解については、本論考「前篇」の目的要請により論じることが

できないが、「後篇」で触れることになる。ただし、小説『由熙』の脱民族性をめぐる林浩治の批判は、氏自身の強い「政治性」や「民族性」の立場にもとづくもので、頷きたいところが多く、検討する余地がある。なお、『由熙』をめぐる小説の方法については、拙論「越境する文学——方法としての『由熙』——」（“PROCEEDINGS OF THE 21st INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LITERATURE [1997]”『国際日本文学研究集會會議録（第21回）』、国文学研究資料館、1998・10）があるのをここに記しておく。

- 3) 金 石範「いま、『在日』にとって『国籍』とは何か 李恢成君への手紙」（『世界』、1998年10月号）
- 4) 李 恢成・金 芝河「＜特別対談＞民族と個人」（『新潮』、1996年2月号）
- 5) 田中 浩「We'reを支える礎になったこと」（『We're』、1993年1月号、発行人：田中浩）
- 6) 李 良枝「わたしは朝鮮人」（『李良枝全集』に所収）
- 7) 李 良枝「私にとっての母国と日本」（『李良枝全集』に所収）
- 8) 小林康夫『出来事としての文学』（作品社、1995・4）参照。
- 9) 「芥川賞作家 李良枝さんをしのんで」（広報『ふじよしだ』No. 506、1993・3）
- 10) カマーゴさか江「李良枝姉」（『ほるもん文化6』、新幹社、1996・2）
- 11) 李 良枝「散調の律動の中へ」（『李良枝全集』に所収）
- 12) 山下淳子「心に穴があいたように」（広報『ふじよしだ』より）
- 13) ミシェル・ド・セルトー『パロールの奪取 新しい文化のために』36頁（法政大学出版局、1998・5）
- 14) ロラン・バルト『文学の記号学』（みすず書房、1984・2）参照。
- 15) 詳しくは、拙論「第三世代の在日の文学——李良枝を中心として」（『日語日文学』第6輯、大韓日語日文学會、1996・11）を参照。

\*この研究は、財団法人伊藤謝恩育英財団1997年度・日本研究助成によるものである。ここに、研究助成をくださった伊藤謝恩育英財団に謝意を表する次第である。